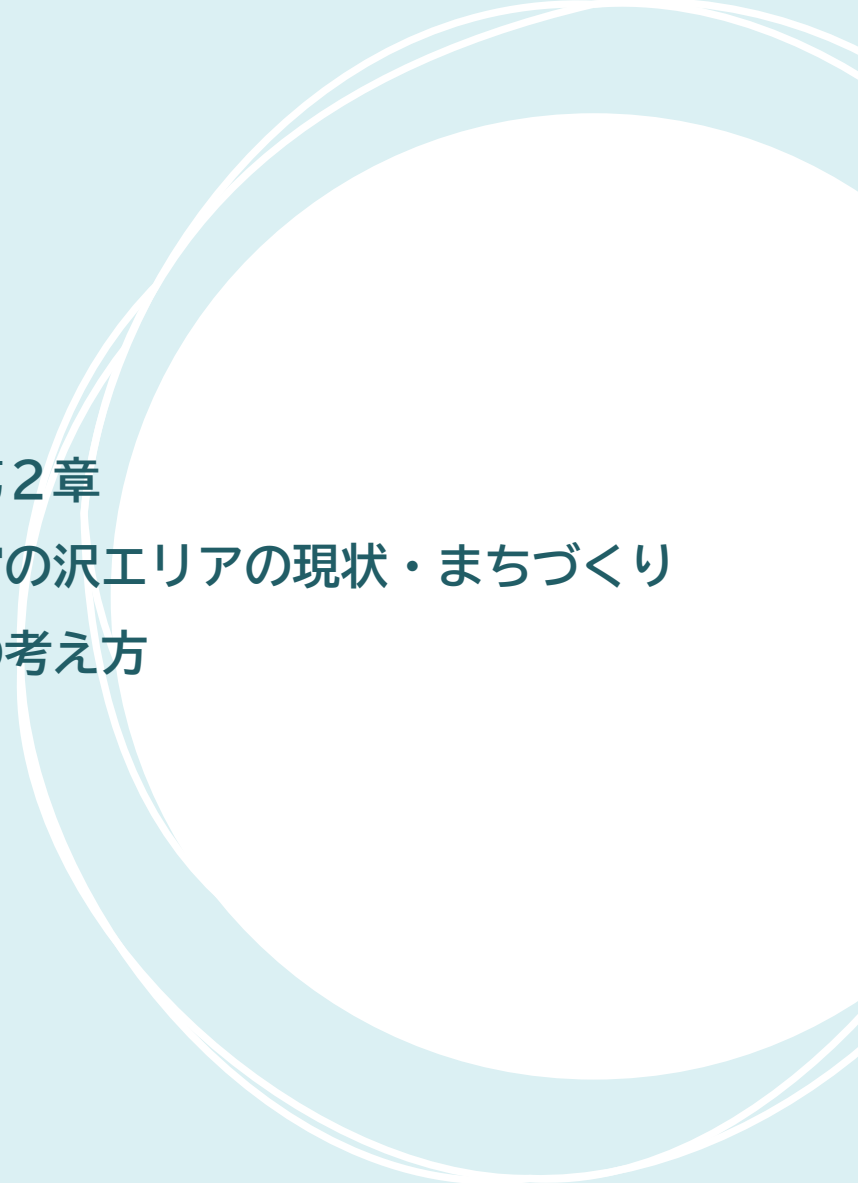




第2章

宮の沢エリアの現状・まちづくり の考え方

第2章 宮の沢エリアの現状・課題

2-1 宮の沢エリアの現状

(1) 人口動態

宮の沢エリアはこれまで人口増加の傾向にあり、将来人口推計※⁹においても令和2（2020）年の12,529人から、令和22（2040）年には13,411人へと緩やかな増加が続くと見込まれています。

一方で、少子高齢化の進行は今後さらに顕著となることが予測されています。年少人口※¹⁰の割合は、令和2（2020）年の約12.2%から令和22（2040）年には約8.5%へと低下する一方、老年人口の割合は約27.0%から約43.0%へと大きく上昇する見込みです。

これにより、人口規模は維持・増加する一方で、人口構成の変化が進行していくことが、宮の沢エリアの特徴として挙げられます。こうした人口構成の変化は、地域住民の日常の過ごし方や移動のあり方、交流や活動のかたちに影響を与える要因の一つになることが考えられます。

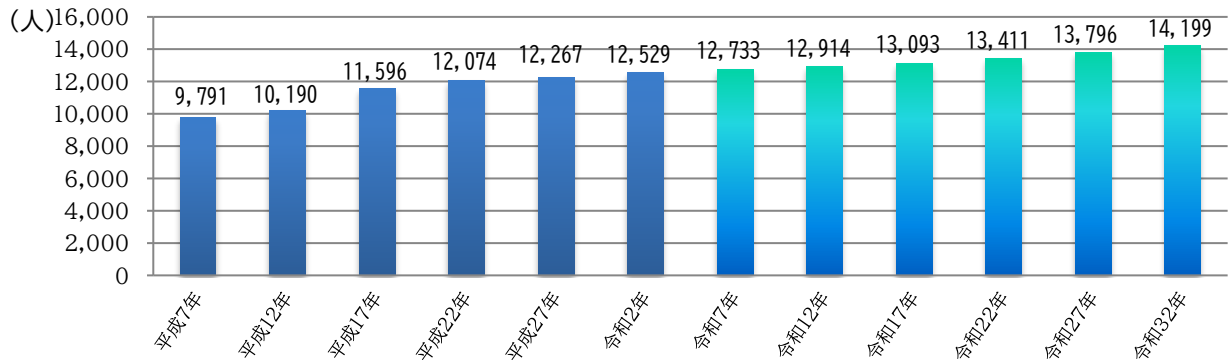


図 宮の沢エリアの人口推計

出典) 国土技術政策総合研究所「将来人口・世帯予測ツールV3（世帯予測実装版）」を使用

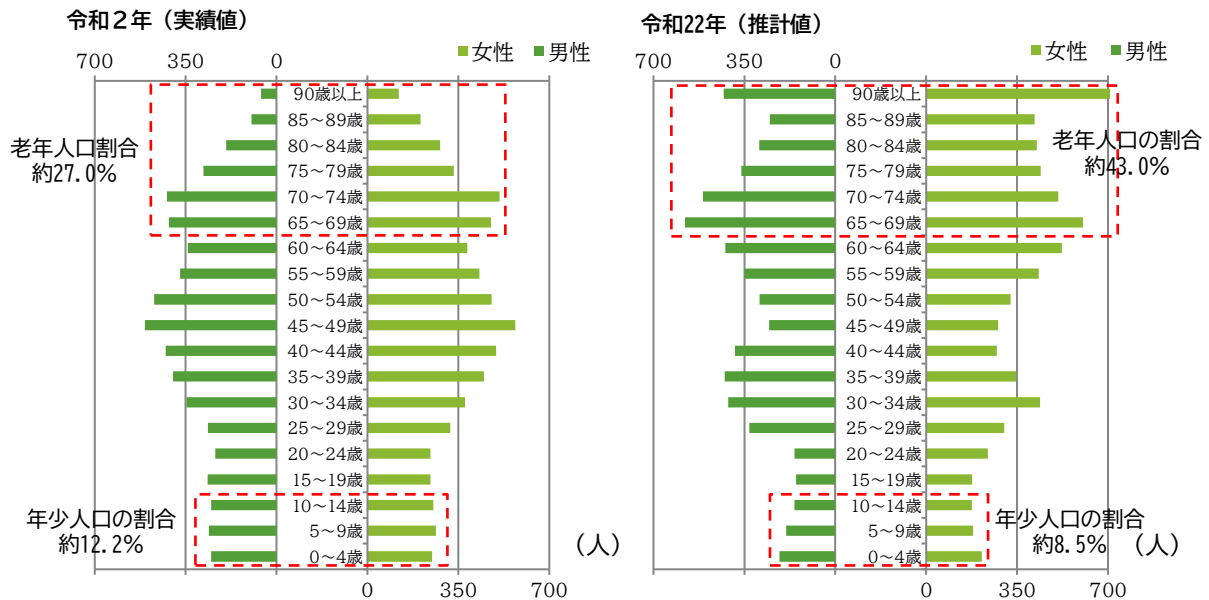


図 宮の沢エリアの人口ピラミッド

出典) 国土技術政策総合研究所「将来人口・世帯予測ツールV3（世帯予測実装版）」を使用

※⁹ 人口推計における対象範囲：発寒六条9丁目、発寒六条10丁目、西町北19丁目、西町北20丁目、西町南19丁目、西町南二十丁目、西町南二十一丁目、西野一条九丁目、宮の沢一条一丁目、宮の沢一条二丁目、宮の沢二条一丁目、宮の沢二条二丁目、宮の沢二条三丁目、宮の沢三条二丁目、宮の沢三条三丁目、宮の沢三条四丁目、宮の沢三条五丁目、宮の沢四条三丁目、宮の沢四条四丁目、宮の沢四条五丁目。

※¹⁰ 年齢区分：15歳未満（年少人口）、15～64歳（生産年齢人口）、65歳以上（老年人口）。

第2章 宮の沢エリアの現状・課題

(2) 周辺環境

宮の沢エリアには、地下鉄東西線の終点である宮の沢駅を中心に、教育文化施設である「ちえりあ」、商業施設、医療施設などが集積しています。加えて、国内外から多くの来街者が訪れる「白い恋人パーク」や「宮の沢白い恋人サッカー場」といった観光施設及びスポーツ施設も立地しています。これら施設へのアクセスは地下鉄宮の沢駅やバスターミナル、札幌自動車道、幹線道路などからなる交通ネットワークにより支えられており、札幌市西部における交通結節点としての役割を担っています。

また、宮の沢ふれあい公園や宮丘公園などの公園、さらには中の川や旧中の川といった河川空間が住宅地や各施設の周辺に立地しています。利便性の高い都市機能が集積する一方で、日常の暮らしの中で身近にみどりに触れることができたり、気軽に立ち寄ることができる環境がある点も、宮の沢エリアの特徴の一つです。

さらには、手稲記念館などの歴史的資源も点在しており、地域住民や来街者が地域の歴史や文化に触れられる特徴もあります。

こうした周辺環境は、地域住民の暮らしやすさに加え、来街者の滞在や回遊のあり方にも関わる要因になることが考えられます。

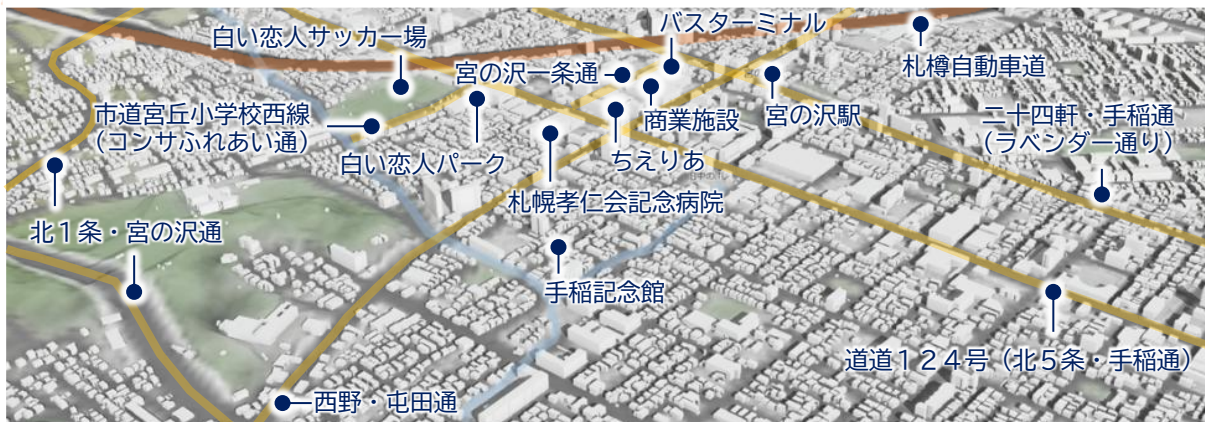


図 主な施設の位置図

出典) 国土交通省：PLATEAUを使用のうえ一部加筆



図 主な公園・緑地の位置図

出典) 国土交通省：PLATEAUを使用のうえ一部加筆

第2章 宮の沢エリアの現状・課題

(3) 来街状況

宮の沢エリアに立地する地下鉄宮の沢駅は、令和5（2023）年における1日あたりの平均乗車人数が約14,000人となっており、札幌市内の地下鉄全46駅中8番目に乗車人数が多い地下鉄駅です。駅に隣接してバスターミナルが整備されていることから、地下鉄とバスを結節する機能も高く、日常的に多くの人の往来する様子が見られるエリアです。

来街者の滞留状況に着目すると、他都道府県からの来街者については観光施設である「白い恋人パーク」の近辺において多くの滞留が確認でき、観光などを目的とした来訪が多いことがうかがえます。

また、札幌市民の滞留状況は、教育文化施設である「ちえりあ」や商業施設などが立地する駅周辺、医療施設周辺などにおいて比較的長い滞留時間が見られます。

このように、宮の沢エリアでは、地域住民による日常的な利用と、観光などを目的とした来街者による利用とが重なり合いながら、人の往来や滞留が生じていることが、特徴として整理されます。

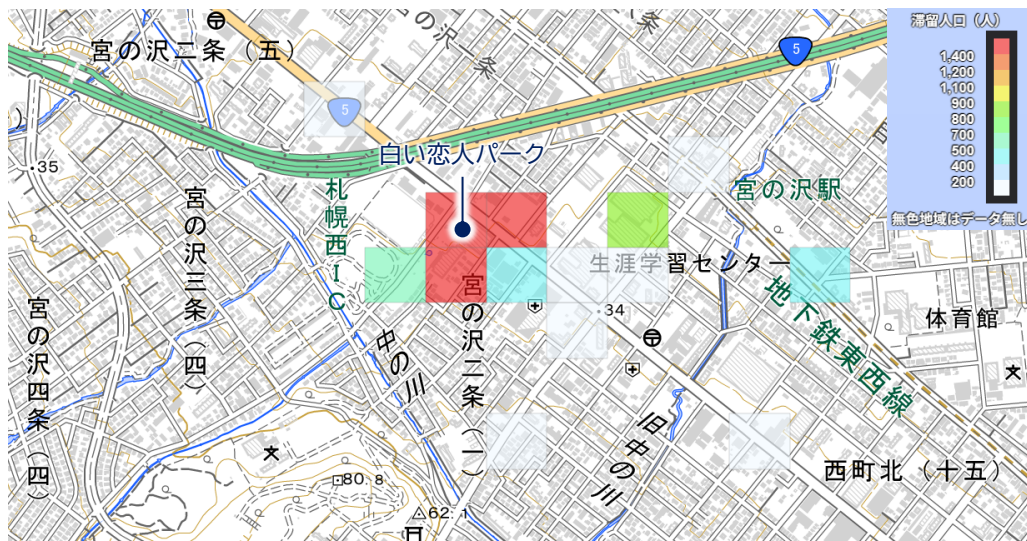


図 他都道府県からの来街者の滞留場所
出典) 地域経済分析システムRESASウェブサイト

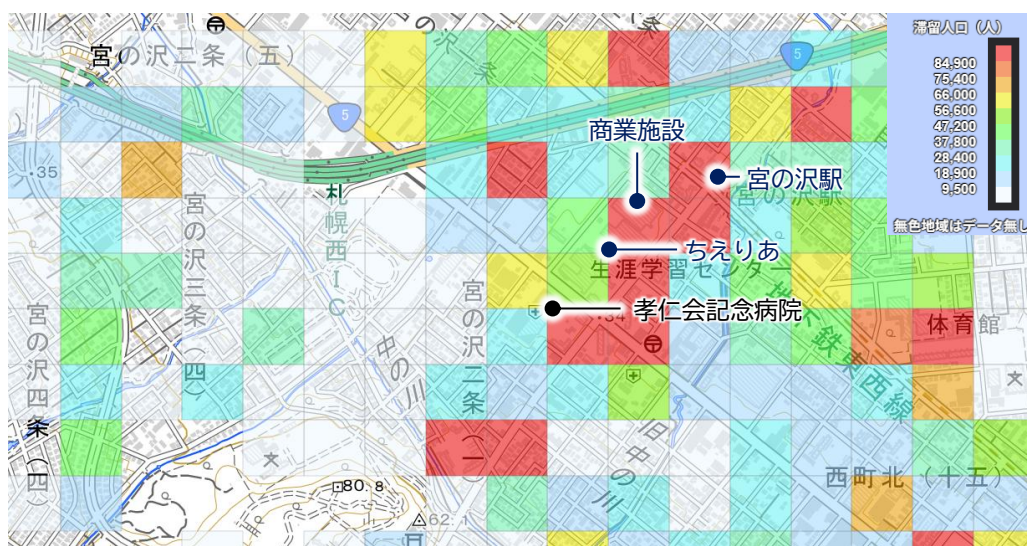


図 札幌市民の滞留場所
出典) 地域経済分析システムRESASウェブサイト

第2章 宮の沢エリアの現状・課題

(4) 土地利用

宮の沢エリアの土地利用は、地下鉄駅周辺や都市計画道路である西野・屯田通や道道124号（北5条・手稲通）沿いに、バスターミナルや商業施設、業務施設、教育文化施設である「ちえりあ」、医療施設が立地しており、用途の異なる土地利用がコンパクトな範囲に集積しています。

さらに、その周辺には戸建住宅や集合住宅を中心とした住宅地が広がっており、日常の暮らしに必要な機能と居住機能とが近接した土地利用構成となっています。

また、住宅地や各施設の周辺に公園や広場などが存在し、都市的な土地利用と身近なみどりやパブリックスペース※11が一体的に存在している点も特徴として挙げられます。

建物の高さは、JR発寒中央駅や宮の沢駅側の建物が高い一方、特に宮丘公園や手稲連山に近い、比較的戸建住宅の多い場所は共同住宅も含め、建物の高さは低くなっています。

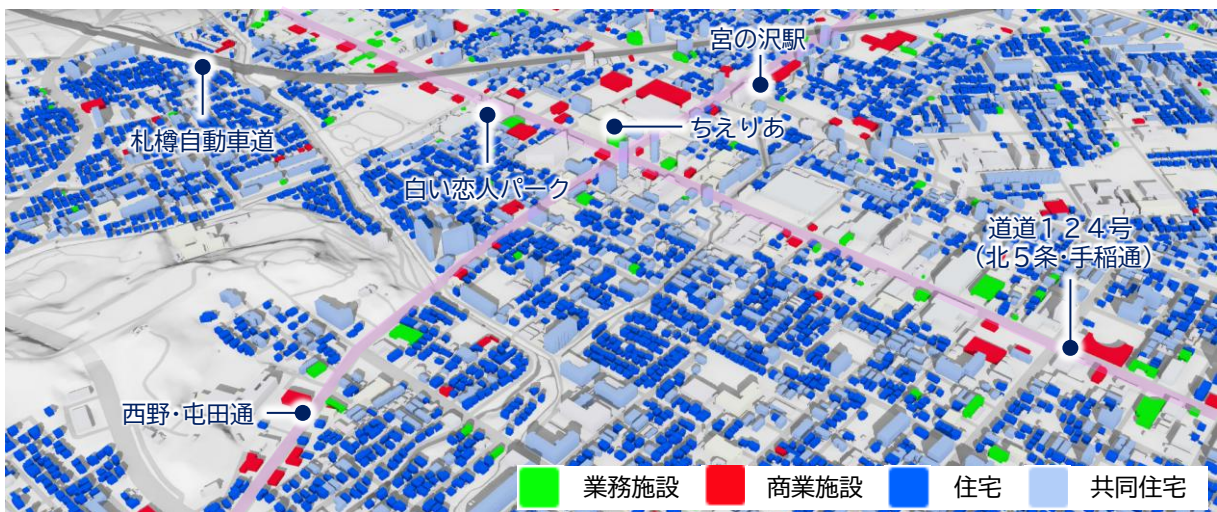


図 宮の沢エリア周辺の建物用途

出典) 国土交通省：PLATEAUウェブサイトを加工して作成



図 宮の沢エリア周辺の建物の高さ

出典) 国土交通省：PLATEAUウェブサイトを加工して作成

※11 パブリックスペース：本指針における「パブリックスペース」とは、公園や広場、アトリウム（吹き抜け空間）など、屋内外において不特定多数の人が自由に利用できる開かれた空間を指します。

第2章 宮の沢エリアの現状・課題

2-2 宮の沢エリアの魅力

宮の沢エリアは、地下鉄駅を起点に公園や広場、観光施設、商業施設、教育文化施設、歴史的資源、住宅地が近接しており、地域住民の日常の暮らしと来街者の利用や滞在が重なり合うエリアです。

歩いて巡ることができる距離の範囲内に、公園などのみどりや、多様な施設や資源が立地していることが、このエリアならではの魅力となっています。

魅力① 交通結節点としての高い交通利便性

宮の沢駅は札幌市営地下鉄東西線の終点駅であり、札幌都心部へ地下鉄で約15分と、アクセス性に優れています。

通勤・通学や日常的な移動において利便性が高いだけでなく、駅周辺にはバスターミナルや主要幹線道路が接続しており、広域的な交通結節点としての役割も担っています。

また、地下歩道の整備や施設との地下ネットワークにより、天候や季節の影響を受けずに、安心して移動できる環境が確保されています。

このような高い交通利便性は、居住地としての魅力に加え、来街者を受け入れる地域交流拠点としてのポテンシャルを高めており、宮の沢エリアの発展を支える基盤となっています。



地下鉄宮の沢駅



地下通路

魅力② 観光施設、教育文化施設の立地による集客交流

宮の沢エリアには、「白い恋人パーク」に代表される観光施設、「ちえりあ」をはじめとした教育文化施設が立地しています。

「白い恋人パーク」は、市内外から多くの来街者を集める観光スポットであり、「ちえりあ」は主に地域住民の日常的な学びや活動の場として機能しています。

以上のように、来街者が訪れる施設と地域住民の活動の場が近接している点は宮の沢の特徴と言えます、「日常」の暮らしと「非日常」の体験が交わる環境が形成されています。



白い恋人パーク



ちえりあアトリウム

魅力③ 身近に自然を感じることができる潤いある環境

宮の沢エリアには、宮の沢ふれあい公園をはじめとする大小さまざまな公園が立地しており、都市機能が集積する駅周辺にありながら、身近にみどりを感じられる環境が形成されています。

なかでも宮の沢ふれあい公園は、地域住民の日常的な憩いの場として利用されているほか、イベントや催しの開催場所としても活用されており、来街者も訪れる、憩いとにぎわいが共存する空間となっています。また、宮丘公園では、手稲山麓の自然林に囲まれた広大な敷地の中で、四季折々の景観を楽しむことができ、宮の沢エリアを代表する貴重な自然資源となっています。

さらに、宮の沢エリアには中の川や旧中の川、上追分川が流れています。旧中の川は、中の川公園内を流れていることから、親水広場が整備されており、水に親しむ環境が形成されています。

また、住宅地や通り、公園や広場など至る所から手稲連山を望むことができ、山並みは日常の暮らしの中に溶け込むランドマークとして親しまれています。

ラベンダー通りの愛称で親しまれている琴似・二十四軒通などは、通り沿いの街路樹や花・緑が季節の移ろいを感じさせる空間を形成しています。

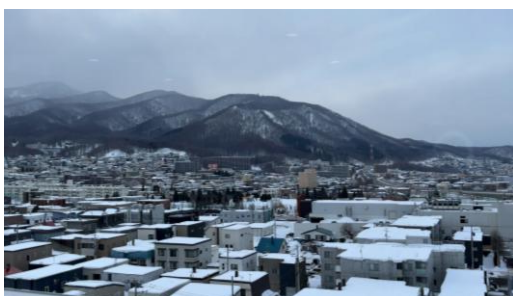
このように、宮の沢エリアは、都市部にありながら公園、河川・山並みといった多様なみどり・自然に触れることができ、四季の変化を身近に感じながら暮らすことができる点が、大きな魅力の一つとなっています。



宮の沢ふれあい公園



宮丘公園 出典：五天山・宮丘マネジメントグループHP



孝仁会記念病院からの手稲連山への眺め



上追分川



中の川公園



ラベンダー通り

魅力④ 官民連携による公共的空間を活用したにぎわいづくり

宮の沢エリアでは、公園や広場、道路などの公共的な性格をもつ空間を活用したにぎわいづくりが、官民連携により展開されています。

宮の沢ふれあい公園やちえりあ前広場では、実証実験的にイベントやワークショップ、マルシェなどが開催され、地域住民や来街者が気軽に立ち寄り、交流できる場として活用されてきました。

これらの取組は、単発の催しにとどまらず、「公園や広場の活用は、市民活動を豊かにし、居心地の良い空間づくりに寄与する」という意識を地域に実感してもらう役割も果たしています。

また、白い恋人パーク内では、観光施設としての集客力を活かしながら、地域団体等と連携したイベントや空間活用が行われてきました。来街者と地域住民が同じ空間を共有することで、宮の沢ならではのにぎわいが生まれています。

さらに、道路空間を一時的に歩行者天国とする取組や、民間施設の敷地の一部を活用した滞留空間づくりなど、従来は「通過する場所」として使われてきた空間を、人が滞在し、活動できる場として活用する試みも行われています。

これらの取組は、地域団体、事業者（企業等）、行政などが役割を分担しながら、また時には連携しながら進められており、官民が連携して公共的空間を活用してきた経験が、宮の沢エリアのまちづくりの大きな強みとなっています。

今後は、これまでの実績を踏まえながら、公共的空間の活用を一過性の取組にとどめず、日常的なにぎわいづくりへとつなげていくことが期待されます。



ちえりあ前広場を活用した実証実験



白い恋人パーク敷地内で実施された
マルシェイベント（ピクニック・フェス宮の沢）



宮の沢ふれあい公園を活用した冬の実証実験
雪上サッカーの様子



コンサふれあい通を活用した歩行者天国（実証実験）

第2章 宮の沢エリアの現状・課題

2-3 宮の沢エリアの課題

アンケート等の各種調査やワークショップ等の意見※12を通じて、宮の沢エリアには次のような課題があることを整理しました。

課題① 主要な施設や資源間をつなぐ回遊性の向上が必要

宮の沢エリアには、多くの人を引きつける観光施設、宮の沢ふれあい公園やちえりあ前広場など、人が集まる施設や魅力的な資源が立地しています。

それぞれの施設や資源は魅力的である一方で、広域に、歩行環境や回遊性を、より向上させる必要があります。

施設及び資源間を結ぶ動線において、歩いて楽しい歩行環境や景観、立ち寄りたくなる仕掛けが不足しており、居住者や来街者の行動が特定の場所に偏る傾向にあります。

そのため、主要な施設や資源を結ぶ動線の魅力を向上させ、回遊性を高める取組が必要です。



地下鉄駅で降車後に、白い恋人パークへ向かう来街者

課題② パブリックスペースなどの日常的利用によるにぎわい・交流の創出が必要

宮の沢エリアには、宮の沢ふれあい公園やちえりあ前広場をはじめとした公園・広場などのパブリックスペースが多く存在していますが、一方で、公園は冬季の利用がされていない、広場はイベント等による非日常的な利用に偏っているなど、日常的な利用または活用が進められているとは言い難い状況です。

パブリックスペースを一時的な活用にとどめず、日常の中で人が立ち寄り、滞在し、交流できる場としていくための使い方や運営の工夫が求められています。



ちえりあ前広場を活用した実証実験

課題③ メインストリートに接する建物低層部のにぎわい形成、出店誘導が必要

通り沿いにおいて、歩行者から内部の様子が見えにくい建物が多く、沿道に人の気配や活動の様子が伝わりにくい状況が見られます。

特に人通りが多い（メインストリート）建物低層部（主に1階部分）については店舗や交流機能などを設け、通りと関係を持たせることにより、沿道ににぎわいを生み出すことが大切です。

歩くことが楽しくなるまちなみを形成するため、1階沿道の使い方を見直していく必要があります。



西野・屯田通

※12 アンケート等の各種調査やワークショップ等の意見：本指針の参考資料に概要を記載。ワークショップ等の意見については、参考資料に掲載しているニュースレターに掲載しています。

第2章 宮の沢エリアの現状・課題

課題④ 花やみどりによる連続した景観形成、歩きやすい環境づくりが必要

宮の沢エリアには、公園や緑地など身近に自然やみどりを感じられる環境があちこちに存在していますが、住宅地や歩行空間とのつながりが十分とは言えません。

住宅外構や歩行空間において、花やみどりを増やして連続性や統一感を加えていくことで、まちの魅力がさらに高まるものと考えられます。

また、ベンチなどの休憩施設の設置や建物の配置の工夫、自転車利用環境の向上などを通じて、季節を問わず歩きやすい環境づくりを進めていくことが必要です。



沿道の植栽やロードヒーティングの敷設等により歩行環境が整っている白い恋人パーク前の歩道（道道124号）

課題⑤ 来街者と地域の居住者の双方にとって、居心地のよい仕組みが必要

宮の沢エリアには、集客力の高い観光施設などを目的に、海外を含む地域外から多くの来街者が訪れています。一方で、地域には日常的に暮らす居住者の生活があります。

宮の沢に訪れる来街者と地域の居住者の暮らしが無理なく共存できるよう、来街者の滞在を促す環境や仕組みを整備するとともに、来街者と居住者の双方が居心地よく過ごせる空間及び仕組みを整えていくことが求められています。



宮の沢エリアを訪れる海外からの来街者

課題⑥ 宮の沢の魅力的な資源を“見える化”し、“情報発信”することが必要

宮の沢エリアには魅力的な施設や資源、活動が存在していますが、それらが地域内外に十分に伝わっているとは言いがたい状況があります。

また、案内や情報発信が限定的であるため、来街者だけでなく、地域住民自身が魅力を十分に把握できていない場合もあります。

地域内の施設や資源、活動をわかりやすく整理し、「見える化」して伝えていく「情報発信」の工夫が必要です。



宮の沢まちづくり協議会が2018年に制作した「てくてく宮の沢マップ」

第2章 宮の沢エリアの現状・課題

2-4 宮の沢エリアにおけるまちづくりの基本的な方向性

宮の沢エリアには、交通利便性や多様な施設、身近なみどりといった魅力がある一方で、回遊性の向上やにぎわいの広がり、担い手や仕組みづくりなどの課題も見られます。

本指針では、こうした魅力と課題の関係を踏まえ、まちづくりを進めていく上での基本的な方向性を以下のとおり整理しました。

